

田舎で人珍らしいのと、それに此男の姿がいかにも特色があつて、そして驚の歩くやうな変てこな形をするので、何とも謂へぬ不調和——その不調和が路傍の人々の閑な眼を惹くもとなつた。

年の頃三十七八、猫脊で、獅子鼻で、反歯で、色が浅黒くツツて、頬髭が煩さうに顔の半面を蔽つて、鳥渡見ると恐ろしい容貌、若い女などは昼間出逢つても気味悪く思ふ程だが、それにも似合はず、眼には柔和なやさしいところがあつて、絶えず何物を見て憧れて居るかのやうに見えた。足のコンパスは思切つて広く、トットと小きぎみに歩くその早さ！ 演習に朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舎を避けた。大抵洋服で、それもスコッチの毛の摩れてなくなつた鳶色の古脊広上にあはつたインパネスも羊羹色に黄んで、右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステッキをつき、柄にない海老茶色の風呂敷包をかへながら、左の手はポケットに入れて居る。

四ツ目垣の外を通り懸ると、
『今お出懸けだ！』

と、田舎の角の植木屋の主婦が口の中で言つた。

其植木屋も新建の一軒家で、売物のひよろ松やら檜やら黄楊やら八ツ手やらが其周囲にだらしなく植付られてあるが、其向うには千駄谷の街道を持つてゐる新開の屋敷町が参差として連つて、二階の硝子窓には朝日の光が閃々と輝き渡つた。左は角等の工場の幾棟、細い烟筒からはもう労働に取懸つた朝の煙がぐるく低く靡いて居る。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてく／＼と歩いて行く。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣、檉垣、要垣、其絶間々々

して、『口も少し若ければ……』と二の矢を継いだが、『何だ馬鹿々々しい、己は幾歳だ、女房もあれば子供もある、』と思ひ返した。思ひ返したが、何となく悲しい、何となく嬉しい。

代々木の停留場に入る階段の処で、それでも追ひ越して、衣ずれの音、白粉の香ひに胸を躍したが、今度は振り返りもせず、大足に、しかも駈けるやうにして、階段を上つた。

停留場の駅長が赤い回数切符を切つて返した。此駅長も其他の駅夫も皆な此大男に熟して居る。性急で、慌て者で、早口であるといふことをも知つて居る。

板囲ひの待合所に入らうとして、男はまた其前に兼ねて見知越の女学生の立つて居るのを眼敏くも見た。

肉付きの好い、頬の桃色の、輪郭の丸い、それは可愛い娘だ。派手な綿物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い囃囃傘、左の手に、紫の風呂敷包を抱へて居るが、今日はリボンがいつものと違つて白いと男はすぐ思つた。

此娘は自分を忘れはすまい、無論知つてる！ と続いて思つた。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、彼方を向いて居る。あの位のうちは恥しいんだらう、と思ふと堪らなく可愛くなつたらしい。見ぬやうな振をして幾度となく見る、頻りに見る。——そしてまた眼を外して、今度は階段の処で追越した女の後姿に見入つた。

電車の来るのも知らぬといふやうに——。

に硝子障子、冠木門、瓦斯燈と順序よく並んで居て、庭の松に霜よけの縄のまだ取られずに附いて居るのも見える。一二丁行くと千駄谷通りで、毎朝、演習の兵隊が駆足で通つて行くのに邂逅する。西洋人の大きな洋館、新築の医者構への大きな門、駄菓子を売る古い茅葺の家、此処まで来ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男は其の大きな体を先へのめらせて、見ても何も構はずに、一散に走るのが例だ。

今日も其処に来て耳を敬てたが、電車の来たやうな氣勢も無いので、同じ歩調ですた／＼と歩いて行つたが、高い線路に突当つて曲る角で、ふと栗梅の縮緬の羽織をぞろりと着た恰好の良い庇髪の女の後姿を見た。鶯色のリボン、縞珍の鼻緒、おろし立ての白足袋、それを見ると、もう其胸は何となく時めいて、其癖何うの彼うのと言ふでもないが、唯嬉しく、そはそはして、其先へ追越すのが何だか惜しいやうな気がする様子である。男は此女を既に見知つて居るので、少くとも五六度は其女と同じ電車に乗つたことがある。それどころか、冬の寒い夕暮、わざ／＼廻り路をして其女の家を突留めたことがある。千駄ヶ谷の田畝の西の隅で、檉の木で取囲んだ奥の大きな家、其の総領娘であることをよく知つて居る。眉の美しい、色の白い頬の豊かな、笑ふ時言ふに言はれぬ表情を其眉と眼との間にあらはず娘だ。

『もう何うしても二十三、学校に通つて居るのではなし……それは毎朝逢はぬのもわかるが、それにしても何処へ行くのだらう、』と思つたが、其思つたのが既に愉快なので、眼の前にもちらつく美しい着物の色彩が言ひ知らず胸をそゝる。『もう嫁に行くんだらう？』と続いて思つたが、今度はそれが何だか佻しいやうな惜しいやうな気が

二

此娘は自分を忘れはすまいと此男が思つたのは、理由のあることで、それには面白い一挿話があるのだ。此娘とは何時でも同時刻に代々木から電車に乗つて、牛込まで行くので、以前からよく其姿を見知つて居たが、それと謂つて敢て口を利いたといふのではない。唯相對して乗つて居る、よく肥つた娘だなどと思ふ。あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなこと、立派な娘だなど、続いて思ふ。それが度重なること、笑顔の美しいことも、耳の下に小さい黒子のあることも、込合つた電車の吊皮にすらりとべた腕の白いことも、信濃町から同じ学校の女学生とをり／＼邂逅して蓮葉に会話を交ゆることも、何も彼もよく知るやうになつて、何処の娘かしらん？ など、其家、其家庭が知り度くなる。

でも後をつけるほど気にも入らなかつたと見えて、敢てそれを知らうとも為なかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインパネス、例の脊広、例の靴で、例の道で例のごとく千駄谷の田畝に懸つて来ると、不図前から其肥つた娘が、羽織の上に白い前懸をだらしなくしめて、半ば解き懸けた髪を右の手で押へながら、友達らしい娘と何事かを語り合ひながら歩いて来た。何時も逢ふ顔に違つた処で逢ふと、何だか他人でないやうな気がするものだが、男もさう思つたと見えて、もう少しで会釈を為るやうな態度をして、急いだ歩調をはたと留めた。娘もちらと此方を見て、これも、『あゝあの人だな、いつも電車に乗